一筆啓上

作左通信

第一一号　平成十二年七月十日(月)発行

短気で頑固な性格から、人々に「鬼作左」と呼ばれ恐れられていた本多作左衛門。そのようなニックネームがつけられた理由が分かる作左衛門のエピソードがあります。

徳川家康は、三河平定後の永禄八年(一五六五年)、三人に三河奉行を任命しました。その一人が作左衛門だったのです。そして、ほかの二人は、高力清長と天野康景でした。

当時、奉行というのは、城下町岡崎の政治や三河国全域の行政や治安の維持にあたっていたようです。

ある年、領民が、「今年は天候不順で不作です。年貢を軽くして下さい」と願い出ました。その時、作左衛門は、「けしからん。毎年不作と申すが、一度でも豊作だからたくさんおさめろと言うたことがあるか。あまりにも不届きなことを言うと、首を斬るぞ、足を斬るぞ」と鬼顔で怒鳴りつけたと言います。

ちなみに、高力は「殿にお慈悲を願ってやろう」といい、天野は「本多と高力は何と申した」と茶を濁したといいます。そこから、「ホトケ高力、鬼作左、どちへんなし(どっちでもない)天野康景」と言われるようになりました。

しかし、作左衛門には領民たちの世情に通じる一面がありました。

あるとき、奉行から領民に盛んに法令が出されましたが、領民は全然守りませんでした。そこで作左衛門は、漢字で書かれている高札(命令などを書き、人目をひく所に掲げたふだ)の法令を見て、「すべてかなにしろ」と役人に命じました。ほかの奉行は猛烈に反対しましたが、作左衛門は聞く耳を持ちませんでした。

ところが、しばらくして異変が起きたのです。領民たちがみんな法令を守っているのです。そのとき、作左衛門は、「領民には、漢字の読めない者がたくさんいるからな」と言ったといいます。

「鬼作左」と異名をとった本多作左衛門ですが、短気と頑固の中に、領民側の立場にたってものごとを考えられる、愛情のある行政マンだったようです。